

ファゴット

【英：bassoon / 独：Fagott / 伊：fagotto / 仏：basson】

..... **楽器データ**

サイズ：全長約 135cm

ファゴットの名曲：ショスタコーヴィチ・交響曲第 9 番、R=コルサコフ《シェエラザード》、チャイコフスキー・《悲愴》交響曲の冒頭、ベートーヴェン・ヴァイオリン協奏曲など

ファゴットを愛した作曲家：ショスタコーヴィチ、ブラームス、ベートーヴェン、シベリウス、プロコフィエフ、チャイコフスキー、ラヴェルなど（※ ファゴット嫌いな作曲家はブルックナー）

ファゴット吹き有名人：「いるわけない」（和久井映見は唯一の経験者か!?!）

.....

突然ですが、ファゴットという楽器、どんな形でどんな音を出しているかご存知ですか？ 今回は、「オケの仲間にもよく正体が知られていない」（メンバー談）ファゴットの秘密に迫ってみます。

オーケストラのステージの木管パートの後方右手に、煙突のように並び立っている茶色の楽器がファゴット。なんとイタリア語で“薪の束”という意味だそうです。木管楽器のなかでも歴史が古い楽器です。低音を担当するため管は長く、太い楽器のなかで管が折り返しているんです。最初に息は、ポーカルという金属製のチューブを通して本体の真ん中あたりから下に向かって入っていきませんが、管のいちばん下でリターンして今度は上に向かい、最後はてっぺんから出てくるのです。

楽器は長いですが、そのわりにケースに片づけるとコンパクトになります。その秘密は——細かく分解可能なんですね。でもそのために、楽器を片づけるのが大変。分解して、一つずつ水分や汚れをふき取って……とやっている、たいいてい片づけ終わるのは全楽器のなかでいちばん最後に。

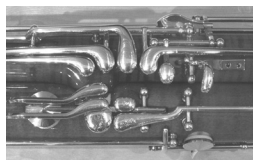
そんなファゴットの音は、温かくてのんびりした感じの独特のものです。今日の《火の鳥》の「子守歌」など美しい旋律は多いのですが、この特色ゆえにテレビ番組でも実はよく使われています。ただし、おとぼけ、お笑い系やズッコケ場面、「なんちゃって～」というシーン、「ドラえもん」などの効果音が、登場する場面。“絶対にラブシーンには出てこない”とか。オーケストラのなかでも単独のメロディ



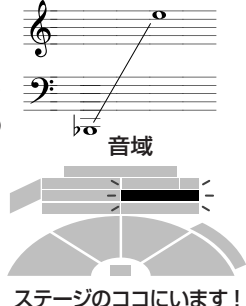
分解するとこんな感じ

は少なく、「これは旋律だ!」と思ったらトロンボーンと重なっていたり……。どんな楽器とも音の相性はいいのですが、とくにメイプルという材質は弦楽器の裏板と同じで音もよく合い、音域が近いヴィオラやチェロと一緒に演奏してメロディの輪郭をはっきりさせる役割などなどもしばしば担っています。ソロもあります、どちらかというと“縁の下の力持ち”的な存在。低音のパートを吹いているファゴットは、木管全体の音色を決めてしまうほど重要です。とくにブラームスの曲などでは、“ファゴットがなければ成り立たない”。なのに目立たず、それでいて間違えるとアンサンブルを崩壊させるという……なかなか大変な役回りですね。楽譜のページ数も、たいいてい曲では木管楽器のなかで一番多いそうです。

ファゴットは、演奏するのが大変な楽器です。なぜって、ふつう音楽の時間に習う縦笛（リコーダー）などは、ド・レ・ミ……と吹くときに下から順番に穴を一つずつ開けていきますよね。でも、ファゴットの場合はそんな生易しいものではありません。あっちの指を上げたらこっちをふさぐという指使いで、しかも親指ばかりやたら酷使するのは。親指だけで、押さえるキーの数は右手が 4 つ（5 つの楽器もある）、左手はなんと 11 個もあって、こっちを押したら今度はあっちと、上にいたり下にいたり奥にズラしてみたり、いっぺんに 3 個のキーを押さなきゃならないことも。近くで見たらとてもいそがしそうで、出てくるゆったりした音とは大違いです。しかもほかの指もたいいてい押さえる穴やキーが 2～3 個はあり、さ



この 11 個のキーを全部左手親指だけで操作する



ステージのココにいます!

らに穴を半分ふさいで半分あけるといいうワザも必要というので、指がつってしまいそうです。

こんな大変なファゴット、最近は吹奏楽でも使われるようになって吹き手も増えてきましたが、以前は“スキマ産業”“パンダなみ”と言われるほど奏者がとても少なかったのです。どこのアマチュアオケでもたいがい欠員がありました。でもそのために、初心者でもすぐに大ソロがまわってきたりなど、たいいていの人はいいい思いをたくさんしているとか。そう聞くとうらやましいですね。

では愉快的なフィル・ファゴットメンバーに質問してみましょう。ファゴットを選んだ理由は？ 「選んだというより、ホルンをやろうと思って大学オケに入ったのに、ホルンは楽器を買わないとダメと言われ、ちょうど余っていたファゴットを吹いてみたらすぐに音が出たわけ。楽器を買わなくてもいいっていうし、じゃあいいか!と」

「私も大学オケでチェロかヴァイオリンをやろうと思ってたんです。でもファゴット希望の人がなくて、ためしに吹いてみたら音が出た! それで、だまされてファゴットになったようなものです。本当は誰でもすぐ音は出る楽器なんですから」「ぼくはオーケストラのコンサートに行って《ポレロ》のソロを聴いて音色が好きになったから」「高校の吹奏楽部に入り、オーボエがカッコよくてやりたかったんですが、中学からの経験者がやることになり、そこへファゴットの先輩に『オーボエと同じだよ』と言われてそのまま……」

——うーん、確かにオーボエも同じような 2 枚合わせのリードを使ってはいるけど。それにしても最初からの希望じゃなかった人が多いんですね。でも今はファゴットを吹いていて、どうですか？ 「もう、最高の楽器だね! まず音色が素晴らしいし、オケの曲ではだいたい難しいところは休みで、いいところだけをとっている。本当にいい楽器にめぐりあえたと思っているよ」

「そう、まわりの人と比べて簡単な譜面でおもしろいところがたくさんあるんです。ソロの裏のハー



本日一番の聴かせどころ《火の鳥》の「子守歌」

モニーを小さい音で吹いているときなど大好きです」

「なんでこんなに素晴らしいファゴットが一般にあまり知られていないのか、納得がいかん!」

——自分の楽器をそんなにも愛せて幸せですねえ。でも指使いも難しいし、苦労も多いのでは？

「リードを自分で削ってると大変です」「そう、最初から自分で作ると、完成まで何か月もかかることもあるんです。それで 20 個作っても、納得いくのは 1 個しかできなかったり……」

「リードは高い市販品を買ってきても、使えないこともあるくらいなんですよ」「楽器が重い。吹くときは首から下げたりしているけど、あとは左手の人さし指の根元だけで楽器を支えているので、ひどいと腱鞘炎になることも」「吹いてるときだけじゃなく、持ち運びも大変です。ケースに入れて 8.5kg くらいあるんですから」「自転車のカゴに乗せてて車にぶつかったんです」「それは楽器は壊れなかったのか?」

——そうじゃなくて、ケガの心配でしょう……。 「オレなんて楽器の片づけがめんどろで部屋にそのまま立て掛けといて、倒したことだってあるぞ」——いや、そういう自慢話じゃなくって……。それにしても、ファゴットやってて楽しそうですね。「それはそうだよ。目立たないからちょっとぐらい間違えたり、吹かなくなったらバれないし」

「仲間と飲めるんだからそれが楽しいんだよ!」

……そうして取材の夜は時とともに酔いがまわり（※ 未成年者の帰宅後です）、最後は取材者もへロへロでメモを見てもどんな話だったか思い出せないという、すっかり“ファゴットのペース”に巻き込まれてしまったのですが、そんなメンバーも楽器を持てば素晴らしいサウンドを響かせてくれます。今日のファゴットパートの活躍に、どうぞ耳を傾けてみてください!

* *

毎回、演奏会のプログラムで、オーケストラで使用される楽器をひとつずつ紹介しています。次回もお楽しみに!



手前はより低音が強烈な音色のコントラファゴット